歴史点描 37　　江戸末期の南海トラフ地震と網干　その１

安政元（嘉永 7、1854）年 11 月 4 日午前 9 時頃に安政東海地震、その約 31 時間後の翌 5 日午後 4 時頃に安政南海地震が起き、伊豆から四国までの広範な地帯に死者数千名、倒壊家屋約３万軒以上という被害をもたらしました。いわゆる南海トラフ地震です。この 2 つの巨大地震に関しては、膨大な文献史料が残されています。（内閣府「1854 安政東海・東南海地震報告書」）

網干・新在家の片岡家『大庄屋日記』（『網干町史』）にこのような記述があります。

「11 月 4 日大地震、朝五ツ時凡一時ばかり、誠に誠に古今稀なる大地震、翌 5 日四ツ半時に又々大地震」さらに、本町南側永念寺（長禄（1457～1460）年中に中興）の借家が倒壊していること、外に壁が落ち、瓦がずれている家がままあることなど、新在家村における地震の被害状況も書かれています。6 日、7 日になっても時々揺れており、家の中には一人もおらず、広場に仮小屋をつくり、船持は船にいつも用いる道具を運んだりしており、この状況に「野宿同様之事にあわれ至極之事に候」と嘆いています。

たつの市揖保川町の永富家『高関堂日記』にも地震の記述があります。

「4 日　朝五ツ過、大地震　　5 日　晩七ツ半時、又大地震、同、大小 5・6 度　6 日　小地震昼 2 度、夜 3 度　　7 日　5・6 度　　8 日　右当国前代未聞の大地震」、そして、播磨では、高砂・加古川・飾磨・網干・赤穂海辺は「大破損」と入手したと思われる情報を載せています。

また、飾磨の木綿亭『万事一代記』には、地震の日時の記述の後「加古川 50 軒ばかりくずれ、あぼし・釜屋村両邑にて 3・4 軒より残り申ず、死人 2 人」の記述があり、また、裏や門に小屋をつくり仮小屋にいること、昼夜幾度ともなく揺れたことなども書かれています。

今回は、江戸末期の南海トラフ地震における網干の被害を 3 つの史料からみてきました。ただし、「日記」というものの性格上、勘違い、記述ミスまた誇張表現もあると思われます。しかし、姫路で震度 5～6、赤穂で震度 6 という分析もあることからも（石橋克彦『南海トラフ巨大地震』）、この地震による網干の被害が大きかったことは想像できます。過去の記録は現代の私たちに防災情報を教えてくれます。まずは、「過去」を知ることが重要ではないでしょうか。

次回も『大庄屋日記』を中心に江戸末期の南海トラフ地震について考えます。（史料は一部現代語に直しています。）

網干歴史講座会員　垣内　小林淳子

「聞書東海道南海道国々大地震大つなミ」
東京大学総合図書館

旧龍野藩南組大庄屋片岡家住宅